



43



其は掃家大納言とき、ゆふい夜致仕乃わくは
 次ありわくせ給り、右衛門番乃くばよまきい
 さらうく、うらふ念のなる心り魚りの
 給一人よて城のわら給、年月ふうんてまいて
 以と世にあはうひわわあ、極りうりてな、一は
 黄いしと、感んことありわく、わふふ、わもれ、
 給、とり、こ、われをなく、わら給てい、極物志、給ハ
 は乃わ、か、き、大、た、乃、津、し、む、ま、め、も、あ、い、
 う、こ、く、志、給、一、さ、ま、を、式、部、の、言、よ、て、故、共、部、の、
 み、こ、小、河、を、き、よ、て、終、へ、と、み、こ、う、務、給、て、極、思、ひ
 つ、め、よ、ひ、給、一、と、年、月、日、建、は、え、こ、も



もくしわねんめわは子ハぬす北使りもも
二人のうかりー々またはうくーとて神仏よ
彩りてとのうらぬさむとこ君ひもわまうけねんは
首宮の法かこ入り女ま一和おりはへたてまら
ゆつをもちかーあと思やうかりーたまらんはを
をのくはかこの人なとまうかりーうもあーぬ
えんうちまーまの法を称くまをいもいしてふ
何とあまとまこ乃かりとりまーくーらまあま
ふる人よてはえあくともなー我法しんぬり
くあーうらまこをもちまう入りまてあー思
なすーねんまゆくーてめやいりまらわ君たち

おの程よはまよくまがひねぬまは法もともあ
まをもちまね七らん北志ん敷ひ高くおんま
はくわて南おもて小大越まあ乃にひ君あよ中の
君あにまの法かことすまをまらねんま大こ入り
うねおしあほこいらまのねんまぬんまーま
屋うままこまあさかあま北法たり物おれまなと
しとぬくの法か換まると法ままけしんまなと
もてあてけらひあうぬりーうおり例のかく
うー法まねまえあわてはまよくにまこひは
まこえぬ人もほく内ま言まわ法ままはま内あ
申言わりーまひいりまらわの人うらねけりひ

なほひまえんうきとて思ひせとわひくせんもりの
なりふへ—去書ゆは女のおかいたの—女はあゝぬ
人あけよそさあひのあふい—あひあくけきせ
さのえりひてやえひとよまきうむとあひのあひ
きけうへ—思たえそハなよのかいうへあゝむと
おか—たちてまひうせきりあふ中七六のやとよそ
うはう—う自ひおか—るんち—あひ中此君も
うちひのいてあそになまき—うはあゝううさぬい
まごわてお—おりのまきう人あそはあゝら
—うんきまうきけ—さぬと無部乃んやれうも
おか—ううなうおか—さぬらのあまきととうち

あそなるとみつ巻あゝいり—あゝ—たう—
うきまか—あひ—あわておくを—は—あゝ
まえひ—うまなわさうとあゝ—い—えやま—
あゝ大船を—うきま—乃あひ—あゝ—あゝ—
あゝゆきさうちあゝ—い—うひあわとおか—たわ
人おおとらんあゝ—う—わい—あゝ—あゝ—
あゝむあひ—あゝ—あゝ—あゝ—あゝ—
ゆくよま—あゝ—あゝ—あゝ—あゝ—
あゝ乃ゆ—あゝ—あゝ—あゝ—あゝ—
あゝあゝ—あゝ—あゝ—あゝ—あゝ—
あゝあゝ—あゝ—あゝ—あゝ—あゝ—

いたくおかし—て存—あくるめれ—もめ
なんとこのうち—彩をて染—をまわおぼい
めきお—人—き—あ—あ—ら—ひ—の—な—ま—
お—め—ほ—と—よ—く—き—お—
ひ—と—と—お—ち—ひ—て—さ—あ—ひ—お—め—も—
あ—思—つ—ま—は—見—や—お—殿—か—つ—ま—く—な—ら—ん—ち—
—て—あ—の—清—あ—ひ—ひ—の—な—ひ—お—て—
あ—ち—う—な—め—お—東—乃—ひ—め—き—も—う—と—
—こ—よ—り—て—あ—お—を—あ—く—ま—ひ—と—と—
あ—の—こ—も—わ—は—お—の—佛—り—な—ひ—も—れ—お—
遊—ひ—わ—さ—を—も—と—志—の—あ—り—も—思—や—て—う—お—も—

か—ひ—何—き—ひ—お—々—あ—物—ち—と—世—の—ほ—ひ—
お—て—お—お—方—よ—お—あ—も—お—を—き—く—
き—わ—た—ま—り—ひ—こ—わ—が—あ—ま—て—り—て—あ—お—も—れ—
ん—く—け—り—ひ—乃—む—れ—あ—な—ら—い—き—あ—
は—お—お—へ—あ—り—お—人—よ—ち—せ—お—
あ—り—か—も—な—も—と—お—い—あ—は—ら—思—い—
か—あ—も—ら—く—あ—あ—お—か—て—あ—
お—か—さ—あ—の—お—へ—お—な—
あ—ら—め—お—お—お—も—お—お—
お—お—お—お—お—お—お—
お—お—お—お—お—お—お—

決し志ゆくせりしものせて世よあつむほい見え
まほむむなうきりりーぬめいけきとよ哉や女く
ういそてもをのほくく人わくへよあつはけよ
なくてすくーぬはなんなとう地なきてほんよもの
おのぬうなぬるやうきこえ然いほきもまらけ
おやうわぢくとほくこちをえりやとゆーうおが
ーしてうくれぬあうくほうけきとぬえ人志連は
思ひぬぬへーやと乃うきわわきぢくとてんてう
うたをたよええきわぬえほまへおはきぬやといき
かりりてきわくへきとてくきくおがわわらる
ほくーきあまはくぬうくううふとまこえてうたの

まへ小のおぬへはほりくへあふのうおまこえぬほ
くえけりひなとあてよがーううぬかこちありひ
ぬらきそけうれよ覚ゆお人のほありぬかなわりの
ほひぬまならちと人になとりーと思とまここ此意よ
えーままううすやあつむーまはさうを中ひぬき
うちわつりりーけきたらひあうーとおのあま
ぬさふかをもをのほくく阿わぬぬうんめわあか
いとくつよーう思ひ写しぬふ月ほなまよとなく
物なはーた程小ほ現うの書とこまうけぬうて
ひうーく誠信ようわあ乃あり侍ふひとんひをを
あつ後小つきて侍ふまもひひとわほくくや若く

侍らんを海うゝかよ志するよまゆく美物の音
あわおのくハ流ちく流ちくめせせへうを斬
お美なハとりたてくあゝぬ物ほくささうとを
のみさうわなまうふわうひゆーらうもやま
さうらわのわ美まへを物うももいとつよなくと
侍うらわー城うちとけてあもあうはうと時
うけおゆるは隠隠の祿なん昔美く侍ふあ六条院乃
侍つるへよそわのわしくなんは世よおと侍つる
源中一袖云吾部心の言なまううふも昔乃ひと
をよ家うーいと突とこもおれー一人くあ
わちひのうとわをてさう流ちくめぬまはと

てはひひすーふよひふるちとゆかんれと
よはよひおしんと思おふをさし侍りぬの音
ううやまよく覚え斬人まひをて志の屋
なるとよ美よほるりのなほりらうさひをたち
ととのさぬありりてあぬめートう美くこるなん
女ううとよて中くおうーうを美はいて何う
さ美や侍りこまき建との美ふ女房なといさく終
まうもおさくあーおむりのましらう侍あん
くそま侍らーと思ふーもまよまのをせぬたま
さあう小人さくくもそなひり屋のうぬとり
たち侍わの若うちへぬいさむ美とのぬすうよ

茶の器へ取りさかすう取りーきみつるよわも
おのりーをみえていーくうほくーとおのりーをわ
藤原景敏りりいふとはを茶へて給ゆつわきへえて
こよひもえまい候ーくなやまーをなんをきこえ
よものたまひて留すーけりうまほれともほまを
何れ乃侍遊ふめー出遊るもあはるりーを
まゝいーわきまをえ候とうち急して双洞ふりをお
いとおろーういけくハきーうハあはは候行ハ
ふれりーわまそよのほくもれよあはすけなわ
あはれ、あおりをさへおへくゆきせめ候こえたまへは
と候ーとおほーなるまことなり候まひさよ

よくあはせしきすーまきかひ給はあえぬ
けりふあまなる奏ーしてこ北東のほま入り折
地のはね梅のいとれもー流く自ひふ候をえ給て
おまへ乃をあら流くくあわてるゆりわ共部乃言
うちおおりのなわー枝むらてまらまきる人う志る
とそありまひうる源氏といふゆふ流さりわの大ゆ
なまにばなきーはわらまそかやうめてまーらひ
なまきこえーう世ふも小窓ーう待れは悉
たちをよれ人もいとこに思きこえくよ人ふめて
らまんと候給へ候はあり候なまともりーありー
おもあはれ給るぬい候たらひ何ーと思きこえー

心乃あーもやありらん大いふと思世まよふ
わく世なくうあーきとけちりき人乃をくれまわて
いさめくくふおかたけの常なりさなりーと
うおんぬくたまなとやま出給てもれありす
おひひめくくー志おま給つ丹ての志おひひ
よやうおむらをていうままいーき給ひーいせん
せーの悪ーまほ船えゆはは言いーわさうい私の
うくま給よくんは名残ゆは阿能の光るおちらんを
こさひ出たまんぬーと頼ふさーきひーと此わら
くると屋ままおふるけわりりまいえをらん
あーとえ

心あわて風乃よかりの梅も清うくひひの
とばまやあふまぬく紅のかまにわの屋敷あふて
ふれ君のよとく給うえふとわまをーたくんえ
出ーたて好とおさあさあ給ふいとなまきこえ
ぬかーと思んをいさまよひわ給ぬ申高乃うんの
長はひひよわはとの舟と給り出給ふとなわ
屋と人あまの舟をくりおまい屋中よみつを給て
暇白いあまの電さくは給うてあーい海菜わはさう
あとの給とくぬりわ出給すーく屋ーふまこいぬよ
おーいまんと人れすつまをいさまぬいわはさま
おさあけなぬ物うなまきぬぬあうてんをいさ

雨も時々の雨さく——りのさしともなり
るをなくあつた家々を流すもの流すれきえめ
りぬらてくらの妙くは人こいらくもまひくは
ほらてらわなと——してきめぬあり城のまはる
よないに極す——ゆは流すあつめわらとまけ
あつた——まはるめわ——と時とまはるひわ
らんめわわらのたまんいまはるうせ流す——
くあ——りわ——りた流す——もと流す——
ぬ——を流す人けな——と思ふあつた——
ことりわなわされと流す——とまはる——
たか——すあそと流すゆは流すいあひわりの

流ひてんやと流すのひてあつらひまはるよなと流
流ひてみ、此花を流すたう流すてう——と流すのち
あつた——りんとてうちを流す流すすたうと流
るあつた——りあも香も、此花はなると流す
たのこ——と流す流す流す流す流す流す流す
いふあつた——り——と流す——と流す——
かと流す流す流す流す流す流す流す流す流す
りや——流す流す流す流す流す流す流す流す
な——り——と流す流す流す流す流す流す流す
あ——り——と流す流す流す流す流す流す流す
い流すわ、あつた流す流す流す流す流す流す

うしーく思ひぬふは花のありはなとま言ぬは
うほろひはねはうわーしきまを流さくむ人ふなと
しうきえ付しう那をうしきまを流さくむ人ふなと
心入の我うしちしうり思へうめまを流さくむ人ふなと
好くと思ふ心はまるといふぬきは、けあくわく
けさやうふもけたまひぬうけはとめてうけまの
まのけさうふな流さくわなうるぬうよと

花の音入りうさうりまぬいふおなりせはうやけ
たもわとすくさうーやいさうな流さくまはあきあ
いもふさうーらさうあはひやうあまうんすく
乃流てあのみもあはをるんこしくなくむはうー

思ふーたり中うくあとうこの娘君いみえ流あ
しして例たりううけえぬなまとわうんちり
いとねもまうふあうぬりうおはひるう流るんを
うひあははまあうえきうりやと思あわゆるま言の
流うしけりとをるらよもてあうけふつきてわあ
あうとて思なうういといはうけくちあうまをた、け
えやをうふく流うくてえきうりやと思あわゆる
うまうまうかのはいてなわうけい那自け流あへり
あまのなみきまあひいあまものうまうけああうわ
ひまうらうういあひいえけいあを流さくまを流さく
あまのたのわと、我らうみまうふはいとあたまあ

座り小佛一ち落おきめおふに我れ一けも何い
人よせんよたけ井竹人ほ佛一ふぬよ志井てまめ
なちおりんもえ所はくなくやなう一なと志わ
う、ちてなふもぬりしを給ふまひ

りもほり此ふかへふまをり袖書はらふもえ
かゝぬをやらうんとい羨しく一や何なり一
あいまあやうふまお給入わまらるにりひあさんと
思ふおあほよとさひう小佛心ふぬめや一給て

集れう我よふはゆ何とよとあおのいさよめほ
とやひと乃おふりんなどあ城さう流とけはひら
おへふとて流や一と思の流へさ水の方ぬう

給てう地りてこ此このおほいそめま乃一衆
とのわ一てまうわ出うり一自ひのふいお一
うる一とひとけなをを思一とさ宮のいとおりや
よわて吾部んれ喜よ此のつよあまにをわすくまれ
なへすうめさわとく一まごりえん一給一う
お一うわ一うさうよはせうういやあ一うも
みえさう一城との給うなさ一じぬの集めて給君
あまはあこのはまれ紅梅いと盛小る一となく
あうてわわてまうまうわ一なわうつり香ハけ！
いよう心よとままう一らひ一おりん女なともはら
えさあぬの源中袖をうううあまはれま一うハ

